

# 正法華經と妙法華經 (1)

——内容による比較——

真 野 龍 海

## §1 成立前後論について

《法華經》の漢訳三本ある中で、成立の前後について、特に、第一訳の竺法護訳 (AD. 286) 『正法華經』(以下、正法華經)と羅什訳 (AD. 406) 『妙法蓮華經』との両訳の先後問題である。さて《法華經》の成立については布施浩岳『法華經成立史』が今に権威とされるものである。その序文に宇井伯寿博士<sup>1)</sup>が、宗学圏内の研究と、客観的研究と二方面があり、宗典となっている経典がそれぞれ研究されている、その相資相輔に努力するのが学徒の本務である、と述べている。所依の宗により、成立論についても微妙に影響がある<sup>2)</sup>ことは否めない。私はその宗に属さないから、逆に、常識とされている事までも知らぬことも多いであろうが、今まで注目されなかった観点で自由に検討でき、一小論たりとも、今まで気づかれなかった新しい調査研究を提示したいと思う。

この私の論文が展開する内容比較の諸問題は、従来の《法華經》に関する論文ではふれていないことが多いし、《法華經》の基本的立場を示すその第二章「方便品」が『初転法輪經』を土台として構成されていることを踏まえて論ずるのは、宗外に多いようで、椎尾弁匡<sup>3)</sup>、姉崎正治<sup>4)</sup>、等で、私も経文の一字一句による詳細な論文<sup>5)</sup>を発表した。

さて、同書で、その両訳の成立について、「年代から言えば法護訳出の原本が最も古い理であるが、形式内容上より観て羅什原本が最古本という結論になる。」とあり、これが現在も一般的な見方となっているようである。しかし、法護訳より古い羅什訳の原本となると、その内容も正法華經程度になってしまうことになるが、如何なものであろうか。

この形式内容上ということを形式と内容とに分けて考えたい。形式には従来の諸論からすると、《法華經》の章立て—諸品の構成—の問題と、経文の分量とがある。先ず、章立てである。現『妙法蓮華經』は二十八品である。しかし、羅什当

時は提婆品は無く、二十七品しかなかったという見解がある(？<sup>6)</sup>)が、それによると、先行の正法華經七宝塔品第十一の後尾には二十七品『妙法華經』にない提婆品相当の内容が正法華經に含まれているから、正法華經が後ということになる。

また、正法華經は囑累品が末尾の第二十七品であるのに、『妙法蓮華經』(以下、妙法華經)では途中で囑累品は第二十二品となっている。この經典の各品の成立上は後者が自然である。例えば、《般若經》でも小品類般若經では古訳以来、囑累品、累教品は同經三十程の章立ての第二十五品前後に位置していて、その後の増加の品はそれに接続して經典の発達を見せている。それから見ると、本来正法華經は最後にあるのは整えられた後世的な感じがする。また、經文の分量も、一般的に、正法華經が10とすれば、妙法華經は8乃至9くらいで、正法華經の方が經文が多い。經典は、簡単、素朴なものから、次第に經文は増量していくのが普通である。因みに本論の検討する「方便品」では、正法華經は5744文字、妙法華經は4922文字である。

さて、このように形式と分量からすれば、正法華經の方が後世のような形式と分量を持っている。翻訳時から見ると逆であるべきであるが、実状はそうである。ところが両經文を対比させて見ると、やはり、文献学的に長く見てきたものには、一目で、新古が分かるような様相を両經文は示している。正法華經の教義が古く未発達であり、妙法華經は遙かに理論だっており、教義が成熟し、正法華經とは百二十年後代の訳時の隔たりによる成熟した発達を示している。すると「妙法華經の原典は正法華經より古い」という表現の妙法華經の原典は、現正法華經と同じくらいに未発達の法華經に後戻りということになるのであろうか。その正法華經より古いとするいわゆる妙法華經の原典という表現は、形式も内容も後戻りになるが、それでいいのであろうか。

私はどちらが古いと判断するのに、架空の原典云々はさておいて、従来論じられなかった現在の両經の内容の比較を一、二行って、相互の新古、というか教理の成熟未成を摘出し比較したい。

## §2 内容の比較 (1) 如来の語源的解釈

この両經内容の問題を《法華經》の成立に鑑み、先ず「方便品」に検討することとする。さらに「方便品」の内容を理解するには、常に土台となった『初転法輪經』の意図を考慮しつつ、語句を理解しなければならない。その意味から『初転法輪經』で初めて現れた如来の語を受けて《法華經》で展開発展した如来の思

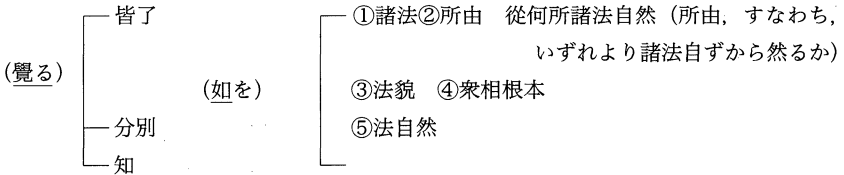
想から両訳の内容を検討する。

最初に、「方便品」の冒頭に近く、妙法華經では十如是、正法華經では五何が現れ、天台教学では一念三千へと発展せられた重要な箇所がある。この所は、『初転法輪經』で、覚った釈尊が、五人の従者等に、覚った今後は、如来と呼べという、その「如来」tathāgata の語源解釈 (nirukti, ニルウクテイ<sup>7)</sup>) から、妙法華經で言うと、諸法実相、十如是が展開するのである。

まずその如来は仏教のニルウクテイでは、いくつかに解釈されるが、ここではその中、二つの代表的解釈がなされている。それは、(A) 如実 (tathā) を、覚る ((adhi) -gata), (B) 如実 (tathā) を、説法する (gata=gada (話す)), という二解釈によって「方便品」が展開した。但しその表現内容では、正法華經と妙法華經ではかなり、異なっており、正法華經は文意整っているようではないが、妙法華經ではその十如是と整然としている。そこで、両經のその箇所を以下のように対照してみる。經文の挿入の(分類)は上記の(A)(B)ニルウクテイに対応させたのである。

(両訳、及び梵本の「如(如を)来(覺る)」「如(如を)来(説法)」のニルウクテイ)

◎正法華經



(説法) 於時世尊〔説法〕欲重解誼 更説頌曰

◎妙法華經

(覺る) — 唯佛與佛乃能究盡 (如を) — 諸法実相

所謂諸法①如是相. ②如是性. ③如是体. ④如是力. ⑤如是作. ⑥如是因.

⑦如是縁. ⑧如是果. ⑨如是報. ⑩如是本末究竟

(説法) 爾時世尊. 欲重宣此義而説偈言

正法華經の読解は難解ながら、表示したように、この經文の箇所は、《法華經》が、如来を tathāgata の覺・説の二つのニルウクテイを意図しているから、先ず覺に相当する知ると言う意味の動詞が 了 分別 知 の三に分けてあるから、その目的語になる①から⑤の五つが諸法の内容になるのではないか。①は総論で、妙法華經の究盡諸法実相に重複して相当する。この正法華經は比較的梵本の方に

対応する。ここの五つの語を順次梵本のそれに当てはめると、①ye ②yathā ③yādrśā ④yallakṣaṇā ⑤yat svabhāvāである。

◎梵本 (覚る=知る jānāti) (説法 dharmān deśayed)

[梵文<sup>8</sup> 試訳] 舍利弗よ、如来というものは (tathāgata eva) 如来の知る (tathāgato jānāti) 諸法 ( dharmān ) を説く者なのだ ( deśayed )。舍利弗よ、一切の諸法をも如来というものは (tathāgata eva) は説いており、一切の諸法をも如来というものは (tathāgata eva) は知っている。

(すなわち) 如来というものは、それらの諸法とは何か (①ye, what), それらの諸法とはどの様か (②yathā, in which way), どの様に見えるか (③yādrśā), どの様な相がある (④yallakṣaṇa), どの様な自性があるか, (⑤yat svabhāvā) という以上の諸々の諸法について如来というのは明瞭 (pratyakṣa) であり, 知見できないものはない (a-parokṣa)。

梵文もさらに、如来は諸法を知り、説く、というニルウクテイが明瞭である。その諸法は五つに細説されている。

以上、両訳を梵文を参考にしながら検討すると、両者共に、如来が如を覺し、説法する、と解釈する二つのニルウクテイは同じであるが、その対象が妙法華經では、諸法実相で、開けば(十)如是で、この十如是がいずれよりも秩序整然としている。正法華經では、対象をすべてを整然とは分けがたいが、五つの①諸法、②所由、③法貌、④衆相、⑤法自然の五つに分かれ、五という点では梵文に似る。しかし、法護の訳文も判じがたい点もあり、それは、原文の未整理を想起させる。その点、妙法華經ははるかに、相と性、体と力と作、因と縁、果と報、というような用語相互間も整備されていて、数段の内容の充実を示している。この当該箇所が正法華經(如来皆諸法~更説頌曰)で39文字、妙法華經(唯佛與佛~而説偈言)が63文字と格段と充実し整備を見せて、百二十年の後代的な經の様相を示している。

但し、訳字数の多少は《法華經》の両訳の場合には、必ずしも年代の前後に比例していない、むしろ、逆の場合が多い。三止三請の場合などは特例である。総体として、訳字数は正法華經が後代の発展増加のように2割くらい多いのである。しかしながら、内容は甚だしくこの如来のニルウクテイでも正法華經は古く初期的で未整備な様相を呈している。後代の經典ほど増廣増大していくものなのであるが、両訳の前後関係は反対である。

### §3 内容の比較 (2) 三止三請について

いわゆる三止三請は『初転法輪經』のそれを受けて以下のように長行と偈文で三回繰り返される。復説されるものもあり、おむね両訳は以下のように対比出来よう。三止三請というも三請の方が願説々々という形で強調されている。(数字等は『大正新修大蔵經』(以下炷と略)第9巻の頁行数、□囲みは両訳共通文字、①②等で私に説時回数を三に分類、(くは重頌))

妙法華經	正法華經
①6b10 唯願世尊敷演斯事	①68c20 <樂慧聖天尊 久宣如是教
①6b26 願佛為解說	①69a2 <請問兩足尊大德願解說
6c02 <願出微妙音 時為如來説	69a7 <唯願演分別
	69a10 <願為分別説
(6c07 爾時舍利弗止止不須復説)	(69a17 告舍利弗且止且止用問此誼)
②6c9 唯願説之 唯願説之	②69a19 唯願大聖如是誼(義?)者加哀説之
②6c14 <唯説願勿慮	②69a24 <願人中王哀恣意説
③6c21 唯願説之唯願説之	③69b4 唯願大聖以時哀説
③6c26 兩足尊願説第一法	③69b8 <願兩足尊哀為解説説
7a5 爾時世尊告舍利弗汝已慙歎三請 豈得不説	69b16 千時世尊見舍利弗三反勸助汝今慙歎所啓至三. 安得不説

さてこのような三度に及ぶ説法請願に対して、兩經訳はどのように釈尊の説法教化の対応を述べるのであろうか。これは《法華經》「方便品」の冒頭に、正法華經では佛道は甚深で、その慧は了解しがたい、と言う。妙法華經でも、難解、難入と説く。それではどうするのかという、方法手段、つまり、方便について以下のように両訳は述べている。

#### 〔方便に関する両訳対照〕

妙法華經	正法華經
1) 5c01 吾從成佛已來。種種因緣種種譬喩廣演 (nirdeśana) 言教 (言辭 nirukti) 無數方便引導衆生。	1) 68a5 如來觀察人所緣起權方便隨誼順導。(如來は人の緣起する所を觀察して、權方便により、誼に随つて順に導く)
5c08 言辭柔軟悅可衆心	猶麤現慧各為分別。而教(散ス?)法 誼用度群生 (柔軟に智慧を現し各人なりに分別し法を教え適宜に群生を度す)

2) 7a18 我以無数方便種種因緣譬喻言辭  
演說諸法。

3) 1 (過去)

7b4 舍利弗。一切十方諸仏法亦如是。  
妬舍利弗。過去諸仏以無量無数方便種種  
因緣譬喻言辭。而為衆生。演說諸法。皆一  
仏乗故。

2 (未来)

7b7 未来諸仏当出於世。亦以無量無数方便種種因緣譬喻言辭。而為衆  
生。演說諸法。是法皆一仏乗故。

3 (現在)

7b11 舍利弗。現在十方無量百千万億仏土中諸仏世尊。…多所饒益安樂衆生。  
以無量無数方便種種因緣譬喻言辭。而為衆生。演說諸法。是法皆為一仏乗故。

4 (今)

7b18 舍利弗。我今亦復如是。知諸衆生有種種欲深心所著。隨其本性。  
以種種因緣譬喻言辭方便力。而為說法。

5 (偈文) 7c23 仏悉知是已 以諸緣譬喻 言辭方便力 令一切歡喜

K.1.54.1 dṛṣṭānta-hettūn bahu darśayanti bahukāraṇāñ jñānabalena nāyākāḥ |  
nānādhimuktāṃsca viditva sattvān nānābhinirhārupadarśayanti || 107 ||

(この方便箇所相当梵文に upāya だけれども、他の 47,69,103,122,125,144 頌には方便 upāya あり)

両訳とも冒頭に、如来の智慧はは難解であること、したがって衆生を引導するためには、方便によって、柔軟な方法、即ち方便によらねばならぬことを述べている。柔軟とは、妙法華經では、5c08「言辭柔軟悦可衆心」、正法華經では 68a6「猗靡現慧各為分別」であろう。梵文では柔軟、猗靡(しなやかに靡くような)の語(mṛduのような語)はこのか所にはない。

しかし、妙法華經の方は、方便の内容については、因緣 ārambana 譬喻 nidarśana 言辭 nirukti 方便 upāya による方便の説法が、冒頭と、過去・未来・現在・今の時稱に四回も整然と反復展開され、なお、重頌にも、この四は明瞭に説かれている。ところが、正法華經では、特に重頌には、方便の語は語として見られるが、それを演繹する妙法華經のような因緣、譬喻、言辭等の四つが整然と繰り返えされない。あくまで仏の教えを、仏は 70a15「瑞人心行而說法」という『初転法輪經』の

k.29, 18 vividhopyā-kausalīya-jñāna-darśana-  
hetu-kāraṇa-nirdeśan 'ārambana2-nirukti-  
prajñaptibhis tais tair upāya-kausalīyais

3) 1,2,3 (去・來・現在)

69c10 十方世界諸仏 世尊。去・來・現在  
亦復如是。以權方便若干種教。各各異音開  
化一切。(妙法華經の言辭 nirukti に対応す  
る語は種教、異音のいずれか?)

対機說法という方向は「方便品」全体としては示しているが、特にニルウクテイは術語として関心が払われていないように思われる。妙法華經で術語ニルウクテイが言辞という形で示されるが、正法華經では、それに対応の箇所は、上記「方便に関する両訳対照」の(3)の箇所である。再掲すると、

3) 1 (過去) (妙法華經))

7b4 舍利弗。一切十方諸仏法亦如是。  
舍利弗。過去諸仏以無量無數方便種種  
因縁譬喩言辞。而為衆生。演說諸法。是法  
皆一仏乘故。

3) 1,2,3 (去・來・現在) (正法華經)

69c10 十方世界諸仏 世尊。去・來・現在妬亦  
復如是。以權方便若干種教。各各異音開化一切。  
(妙法華經の言辞 nirukti に対応する語は種教、異  
音のいずれか?)

妙法華經では言辞(ニルウクテイ, nirukti)は他の因縁等の語と共に安定した訳語となっているが、正法華經では、その意味が明示されない。そもそもニルウクテイは古代には術語として妙法華經のように当該文面上には明示されず、常識であった。明示されている妙法華經は後世的と言えよう。

以上、三止三請後の說法の方法、方便について、妙法華經では、正法華經より、方便、因縁、譬喩、言辞という四要素が整然と説かれ、時稱に於いても、過去・未来・現在・さらに、今の時というように四度も五度も提示されている。一つのテンス、時稱を過現未に展開、発展するのは經典作法の常である。正法華經は、妙法華經より内容の未整備とは反比例に逆に經文の量が、全体では多い。しかし、この三止三請の箇所では、妙法華經の方が經文の分量も三、四倍と多く、発展を示し、時代を経ている事を反映する。増大し拡大した經典が、収縮することもあるが、しかし、以上の検討した内容の一、二を比較しても、正法華經から妙法華經への発展整備を示すものばかりである。特にニルウクテイによって、如来等の語の分析と理解を中心に、妙法華經が後世的内容を整えている事が注目すべきである。

今回は、両訳の二、三の内容比較に止まったが、今後、この「方便品」両訳における童子, nava (新 or 九)等の概念でも両訳の懸隔を述べる予定である。

- 1) 布施浩岳『法華經成立史』1967改訂,「法華經成立史に序す」
- 2) 勝呂信静『法華經の成立と思想』1996, 改版, 東京, 大東出版社, p. 3.
- 3) 椎尾弁匡『經典概説』1993, 東京, 甲子社書房, pp. 403 ~ 404 頁.
- 4) 姉崎正治『根本仏教』1912, 東京, 博文館, pp. 77 ~ 79.
- 5) 真野龍海「《法華經》「方便品」と『初転法輪經』, 『大正大学研究紀要 第七十七輯』

1992, pp. 1 ~ 31.

- 6) 立正大学仏教学会『大崎学報第 141 号』1986. 伊藤瑞叡「法華經成立論史 (その二) p. 23. 羅什原訳 (提婆品) 無品説とも言うべきものが、特に、その流れを汲む法雲・聖徳太子の注釈もとりあげないこともあり、支持されている。しかし、『妙法蓮華經文句』第八下 (炬 34,114. c) 引用の衆經目録には、天台の弟子僧叡にその『法華經』を講義させ、当時二十八品とある。両存両欠というが、前者は正法華經と妙法華經の二經、後者は江東の伝えるただ二十七品と、満法師の私に持品の前に置くもの、即ち、二十八品、陳の南岳も正法華經に対応して二十八品にしたものの両者が、両欠と言うのであろう。
- 7) 赤沼智善『原始仏教の研究』1939, 三, pp. 307 ~ 321. 「如来の名義について」、特に p. 319. 天台大師は如来に対しては漢字によるニルウクテイとも言うべき釋を施しているから、本来のニルウクテイは全く考慮されてもいない。即ち如来について「如来半句即釋実智。從真如実相来。而得成仏道故名如来」という漢訳如来の漢字の解釈である。梵文では来の意味はここではとっていない。
- また、ニルウクテイの訳である妙法華經本文の語辞は、『妙法華文句』第三下 (炬 34,41c.) では無視されている。
- 8) H. Kern and Bunyiu: Saddharmapundarika. 1908-1912. p. 30.1.2.
- 9) 正法華經の因縁とは經典の縁起で、意味が変化している。

〈キーワード〉《法華經》の「言辭」、《法華經》の如来

(大正大学名誉教授, 文博)

新刊紹介

片山一良訳

パーリ仏典〈第一期〉3

中部 (マツジマ) 中分五十經編 I

A5 判・498 頁・定価 9,500 円

大蔵出版・平成 11 年 6 月 10 日